

展示記録

企画展「学都仙台を支えた「天財」－斎藤報恩会と東北大学」

曾根原 理・永田 英明・村上 麻佑子

会期 平成27年 9月30日 (金)～12月27日 (火)

会場 東北大学史料館 2階 第2企画展示室

一、企画の趣旨と開催の経緯

企画の趣旨と経緯

東北大学史料館では、平成28年度の企画展として、「学都仙台を支えた「天財」－斎藤報恩会と東北大学」展を平成27年 9月30日 (金) から12月27日 (火) までの日程で開催した。

大正12年 (1923) に設立され、長年にわたり東北大学ほか東北地方の学術研究や産業振興に多額の助成をおこなってきた一般財団法人斎藤報恩会は、平成27年 3月末を以て一切の事業を終了しその歴史に幕を閉じた。

同財団が所蔵する膨大な資料のうち、博物館事業にともなって収集・所蔵していた学術的資料は、仙台市博物館 (古地図・古文書・書籍等) や仙台市科学館等にそれぞれ寄贈されたが、財団の創立以来の運営にかかる種々の記録・文書については、財団と東北大学の歴史的関係をふまえ、東北大学のアーカイブズ施設である東北大学史料館が引継いで保存・公開を行うこととなった。

当館ではこれより以前から同財団の資料調査を独自に進めていた吉葉恭行氏・米澤晋彦氏等の協力を得て、平成28年10月に総数500点以上にわたる資料について同会事務所からの引継ぎを行い、現在公開のための準備作業を進めている。本企画展は、このような経緯のもと、当館が同会から引き継いだ資料の「お披露目」の意味を込めて企画したものである。

企画の重要な契機となったのは、同じく斎藤報恩会からの資料を引き継いだ仙台市博物館の担当者からの提案であった。仙台市博物館では、当館の企画展開催時期に重なる形で平成28年11月11日～12月27日に「戦国の伊達・政宗の城・仙台の町－斎藤報恩会寄贈の名品－」展を開催したが、企画の段階から両館で広報面や講演会などでの協力について協議し、後述のように仙台市博物館の菅野正道氏による講演を当館の講演会の企画として実施した。当館の企画展でも仙台市博物館の企画展との関連性を意識した展示コーナーを設け、役割を異にする二つの隣施設で連携した展示を行うことで、相乗効果を得ることが出来たのではないかと考えている。



二、展示の構成と内容

企画の検討と準備過程

当館の展示は、永田・村上・曾根原がそれぞれ分担して原案を作成し、それを相互に検討し合いながら形づくることとなった。斎藤報恩会の設立（永田）、学術助成や博物館事業など報恩会の運営の全体像（村上）、文科系に対する学術助成（曾根原）、理工系研究者および東北大学以外への学術助成（永田）という形で分担し、また報恩会の社会事業について三名の共同でコンテンツを作成した。8月下旬にパネル案の確定・業者への原稿入稿をおこない、同時に展示物を確定しキャプション原稿を作成した。

9月12日（月）～16日（金）には、博物館学Ⅵ「館園実習」の受講生11名が当館での実習として展示準備に参加した。実習では展示資料の出納・配列などの作業に参加すると共に、特定の資料のキャプションの検討・作成を担当し、さらにはSNSによる情報発信の文案作成など、広報活動の実習も行った。



展示の内容

展示は（1）斎藤報恩会の設立とその運営を支えた人々（2）斎藤報恩会の学術助成事業の内容という二つを中心的なテーマとして設定し、さらに（3）斎藤報恩会の社会事業についても補足的に取り上げることとした。（1）については斎藤善右衛門有成による財団設立の経緯を「財団法人斎藤報恩会寄附行為」（A-3）「斎藤報恩会設立許可書」（A-2）など今回寄贈された斎藤報恩会文書の重要資料とともに紹介するほか、報恩会設立時における小川正孝・井上仁吉など東北帝国大学教授たちの役割、小倉博・畑井新喜司など報恩会運営の中心となった東北帝大関係者の活動などをとりあげた。特に初期報恩会の屋台骨とも言うべき畑井新喜司については、ロックフェラー財団と提携した人類生物学講座の開設や斎藤報恩会博物館など多彩な事項をとりあげ（展示コーナーC、D）、また昭和30年度卒業式「太平洋学術会議について」（当館所蔵）をもとにした音声コーナーを設けて畑井の人物像への接近を試みた。

（2）においては、最初に報恩会の学術助成事業の全体像をグラフ等を使って解説し、その後人文社会科学系（F～H）、自然科学系に区分しながら、報恩会の助成を受けて行われた個々の事業について紹介した（I～K）。展示資料としては、斎藤報恩会文書中の学術助成申請に係る資料に、公文書や歴史的機器など当館所蔵の関連資料を交えて展示を構成した。なかでも有用だったのが、報恩会の助成が最も大規模に行われた大正末から昭和初期における大学への物品寄附の記録である『昭和二年以降 寄附関係書類』（特定歴史公文書）である。西蔵大蔵経やヴァント文庫など学術的に名高い各種の蔵書や標本はもちろん、実に多様な機器・設備が報恩会の資金で東北帝国大学に揃えられる状況を跡づけることができ、東北帝国大学の研究環境整備に果たした報恩会の役割を改めて確かめることができた。また「学都仙台と斎藤報恩会」（L）では、旧制二高ほか東北帝大以外の在仙研究者への助成をとりあげ、報恩会が地域研究・郷土史研究に対しても積極的な助成を行っていたことを紹介。同時開催の仙台市博物館企画展に関連する

資料も展示した（L-2, 3など）。

（3）斎藤報恩会の社会事業はパネルのみの展示となったが、報恩会が社会事業の中で最も力を注いでいた、小牛田の宮城県立斎藤報恩農業館運営などの農業振興事業、あるいは日本赤十字社への助成を通じた医療活動、さらには保育事業や各種の教育事業など多彩な事業をとりあげ、地域振興・社会改良における報恩会の役割についても紹介を行った。

三、広報および公開状況と来館者の反応

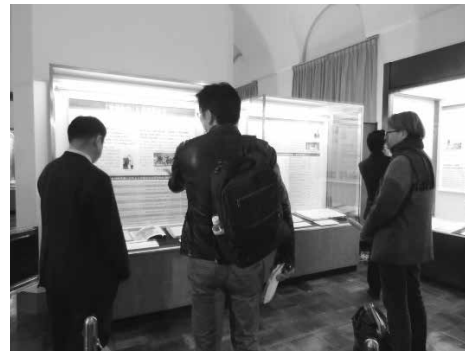
企画展開催に合わせ、10月1日（土）から30日（日）までの間土曜・日曜日も開館し、また11月3日（木）も後述のイベントに合わせ開館を行った。展示開催に際しては10月4日付けでプレスリリースをおこない、また市内・県内の公共施設等を中心にポスター、チラシ等の配布をおこなった。また今回は仙台市博物館との連携企画と言うことで、仙台市博物館の企画展「戦国の伊達・政宗の城・仙台の町－斎藤報恩会寄贈の名品」展の広報ポスター等においても関連展示として情報を掲載してもらうことができた。

11月3日、13:00から公開講座「学都仙台と斎藤報恩会」と題し（片平北門会館エスパス）、出雲科学館講師の米澤晋彦氏と仙台市博物館の菅野正道氏の講演会を開催した。米澤氏には、今回当館に寄贈された斎藤報恩会文書の分析をもとに斎藤報恩会と東北帝国大学の関係を当時の時代相との関わりから解説していただき、また菅野正道氏は、同博物館の企画展の紹介も兼ねて、郷土資料の保存と郷土史研究の発展という観点から、斎藤報恩会とそれにまつわる人々の役割をわかりやすく解説していただいた。当日は43名の参加者があり、講演会終了後の展示解説会にも少なからぬ方が参加し、熱気に溢れた会となった。なお11月25日には、仙台市博物館と当館の企画展についての記事が朝日新聞に掲載された。

またSNSへの情報発信も期間中定期的におこなった。今回展示した資料の解説を発信する他、博物館実習生が企画展をアピールするために作成した文や写真についても掲載し、学生目線を取り入れた多角的な広報活動につなげることができた。

期間中の来館者は合計1366人に及んだ。展示室におけるアンケート（自由記述）の中からの企画展に関係する記述をいくつか抜粋紹介しておく。

- ・博物館の企画展を見た後こちらの展示を知り参りました。多岐にわたり研究を支えてきたことがよくわかりました（東北大OB）。
- ・色々聞いてはいましたが、まさに学都仙台を支えた天財ですね。斎藤報恩会解散の報道は残念でしたが東北大学ではその記録をいつまでも伝えてもらいたいです（一般）。



- ・ 斎藤報恩会は博物館もなくなりさびしいですが、創立からの役割、成果、ロックフェラー財団のような海外の財団との対比などよく分かり、学問とお金についてのよい問題提起になっていると思いました (東北大OB)
- ・ 斎藤報恩会の文書で新しいことが分かりましたら逐次公にしてください (一般)
- ・ 斎藤氏の財力の大きさに驚きました。東北大学にとっては戦中の厳しいときにも大きな力となっていたことを知りました (一般)
- ・ 報恩会が解散して資料等が散逸しないようにおねがいます (一般)
- ・ 斎藤報恩会について、東北大学をはじめとする研究機関にいかにも大きな力となったのかを知ることが出来た。閉じられたのは残念ですが、このように各施設に資料と理念が引き継がれていることをうれしく思います (一般)
- ・ The exhibition of 斎藤報恩会 shows me a good knowledge of how the researchers doing their projects in 1920,30's. The cooperation of sponsors and scientists made the development in technology and art. And it shows how Japan developed so fast in recent 100 years. (一般)
- ・ 学部一年次に「東北大学を学ぶ」という講義で、斎藤報恩会を知りました。定期的に行って下さるとうれしいです (大学院生)

四、まとめと課題

今回の企画展の特色として、(1) 斎藤報恩会文書という、東北帝大と深い関わりのある民間組織をテーマとしたものであること。(2) 仙台市博物館という地域の代表的な博物館と連携した展示であること、この二点をあげることができよう。仙台市博物館との連携展示が実現したのは、斎藤報恩会という組織そのものが、東北大学と地域社会との関わりを象徴する存在であったことを良く示していると思う。当館で預かることとなった斎藤報恩会資料は、東北大学の歴史にかかわる資料であると同時に、それ以上に地域社会の財産でもあり、当館の所蔵資料の中でも独特の意味を持つと思われる。今後は展示という方法に限らず、この資料を様々な形で利用に供し、地域の公共財産として活用を図っていくことが必要であろう。

(付記) 本報告のうち、前半の展示全体にかかわる概要報告は、永田が執筆した原稿に曾根原・村上が加筆修正を加え成稿した。後半の展示キャプション等については、各自が分担執筆した内容をそのまま掲載した。

展示記録

「学都仙台を支えた天財－斎藤報恩会と東北大学－」展

展示資料・展示解説（パネル・キャプション）一覧

【はじめに】（パネル展示）

斎藤報恩会は、日本を代表する資産家として全国に名を知られた桃生郡前谷地の大地主・斎藤善右衛門有成が1923年（大正12）に設立した財団法人です。

その莫大な財産を「神の使命により依託されたる人類の共有財産たる一部」たる「天財」ととらえ「人類の幸福に提供」する事を目的にされたこの財団が最も中核的な事業としたのが、東北地方の様々な研究者に対する学術助成事業でした。そこには、学術研究の発展が社会を変えていくことへの大きな期待が込められていたと言って良いでしょう。

誕生してまだ日が浅い「東北帝国大学」とそこに集まった学者たちは、この斎藤報恩会からの支援をもとに学問の府としての環境を整え、またそれを足がかりに、国際レベルの研究成果を生み出していきます。同時に報恩会の助成は、東北地方や仙台といった足下の地域を対象とする研究にも向けられ、地域の学術文化や地域社会の発展にも役立てられてきました。斎藤報恩会のこうした様々な学術・文化事業そのものにも、東北大学の関係者が深く関わりを持ち、これをサポートし続けてきました。

戦中・戦後の時代を越え100年近くも学徒仙台や東北地方の学術・文化を支援してきた斎藤報恩会は、2015年9月、その役割を終え静かに終焉を迎えました。その際、創立から解散に至るまでの会の運営に関する資料は、東北大学の歴史に深く関わる記録として東北大学史料館が引継ぎ、保存・公開を進めていくこととなりました。

今回の展示会では、この斎藤報恩会からの寄贈資料のお披露目も兼ねて、斎藤報恩会の歴史的役割を特に戦前期を中心に、東北大学との関わりという視点からご紹介したいと思います。期間中には、斎藤報恩会と学徒仙台のかかわりをテーマにした講演会も開催する予定です。

また今回の企画展は、仙台市博物館で開催されます「戦国の伊達・政宗の城・仙台の町－斎藤報恩会寄贈の名品」展との同時開催となっておりますので、当館の展示とあわせてお楽しみいただければ幸いです。

開催にあたりましてご支援及びご協力をいただきました皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

【年表】(パネル展示)

齋藤報恩会のあゆみ

西暦 (和暦)	内容
1901 (明治 34)	齋藤善衛門が中学以上の学生に育英貸費事業を開始 (8月)。
1905 (明治 38)	真宗大谷派本願寺の財政整理を担い、負債の弁済に成功。
1909 (明治 42)	齋藤株式会社設立 (12月)。宮城県図書館建築費5万円を寄付。
1916 (大正 5)	東京帝国大学の仏教哲学講座の研究資金寄附。
1921 (大正 10)	善衛門が学術研究支援のため澤柳元総長に相談 (6月)。小川現総長が「学術研究所」設立を建言 (8月)。井上仁吉工学部教授が財団の学術研究事業を提案 (9月)。財団法人齋藤報恩会設立のため認可を申請 (10月)。
1923 (大正 12)	財団法人としての認可を受け、寄付行為により学術研究事業、社会福祉および産業開発事業の実施決定 (2月)。「ヴェント文庫」等の購入、「狩野文庫」購入に対し寄附 (8月)。
1924 (大正 13)	八木秀次らの「電気を利用する通信法の研究」への補助を開始 (3月)。中村左衛門太郎による「地形及び地物の地震動に及ぼす影響に関する研究」への助成開始。
1925 (大正 14)	事業拡張に伴い学術研究総務部を設置。畑井新喜司が部長に就任 (5月)。宇井伯寿らの「西蔵仏典の研究」への研究費補助を開始 (12月)。
1926 (大正 15/ 昭和元)	アメリカのロックフェラー財団と提携し、東北帝国大学に人類生物学の講座を設ける (3月)。産業及社会総務部を設置。初代部長は木村匡 (5月)。
1928 (昭和 3)	ロックフェラー財団から派遣されたル・ブランが研究講義を開始 (2月)。
1929 (昭和 4)	本多光太郎・青山新一による「低温研究」への補助を開始 (2月)。
1930 (昭和 5)	産業調査所を設置 (4月)
1931 (昭和 6)	理事会が齋藤報恩会博物館規定を承認し、畑井新喜司の初代館長就任が決まる (12月)。齋藤報恩会館建設着工。金属材料研究所内に低温研究所が誕生。
1932 (昭和 7)	大久保準三・増本量による「物質の磁性に関する研究」への研究費助成開始 (4月)。
1933 (昭和 8)	齋藤報恩会館竣工 (5月)
1935 (昭和 10)	ハワイのビジョップ博物館の協力により第一回南洋学術探検隊を派遣 (12月)。
1937 (昭和 12)	本多光太郎による「農学研究所の設置」に対する助成を開始。
1939 (昭和 14)	東北帝国大学農学研究所が完成。
1943 (昭和 18)	齋藤報恩会館が軍需省軍需管理部に強制収容される (8月)。
1945 (昭和 20)	仙台空襲。高性能爆弾が会館に命中し博物館資料の三分の二が焼ける (7月)。
1948 (昭和 23)	齋藤報恩会の一階、二階部分にGHQによるCIE図書館が会館 (5月)。齋藤報恩会事務所を再開。戦災復興に着手する (10月)。
1951 (昭和 26)	学術研究費助成事業を本格再開する。宮城県に博物館登録を申請し認められる。
1952 (昭和 27)	CIE図書館がアメリカ文化センターに改称。
1953 (昭和 28)	齋藤報恩会博物館を再開する。
1967 (昭和 42)	アメリカ文化センターが退去し、仙台市美術館が開館する。
1973 (昭和 48)	齋藤報恩会館 (自然史博物館) 建設のため旧会館の解体工事が始まる (8月)。
1975 (昭和 50)	新しい齋藤報恩会館が竣工 (4月)。
1976 (昭和 51)	齋藤報恩会自然史博物館が開館 (11月)。
2006 (平成 18)	10万点近い収蔵資料の大部分を国立科学博物館に寄贈 (2月)。
2007 (平成 19)	齋藤報恩会の建物および土地を売却。同建物で事業を継続する (3月)。
2008 (平成 20)	常設展示を閉じる (6月)。
2009 (平成 21)	財団事務所を移転し、「齋藤報恩会博物館」を開館。
2015 (平成 27)	齋藤報恩会博物館を閉館 (3月)。

※年表は『財団法人齋藤報恩会のあゆみ』(財団法人齋藤報恩会、2009年)を参考に加筆の上作成した。

〔1〕 斎藤報恩会の誕生

A. 「斎藤報恩会の誕生」

A-0. 解説パネル

斎藤報恩会の誕生

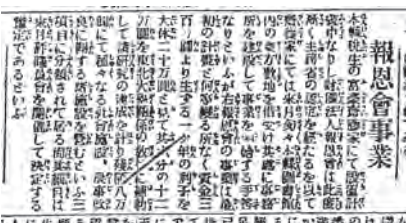
● 斎藤家の繁栄と社会事業への関心

斎藤報恩会は、陸前桃生郡前谷地村（現石巻市前谷地）の大地主斎藤家の当主、九代目斎藤善右衛門有成が設立した財団法人である。斎藤家は江戸時代から酒造業で財を築いたが、明治中期以降金穀貸付業に比重を移して更に莫大な財を成し、山形・酒田の本間家と並ぶ大地主として広く名を知られるようになった。

こうして貯えた財産をもとに、善右衛門は、本格的な社会事業に着手しはじめる。1901年（明治34）からは中学校以上の学生を対象とした育英貸費事業を開始し、1923年（大正12）までに246人が貸費を受けた。また1909年（明治42）には宮城県図書館の建設に際し5万円の建築費を提供し、大正3年からは宮城県下教育者の県外視察費を支出するなど教育関連事業を中心に支援を始める。浄土真宗大谷派本願寺の熱心な信徒であった善右衛門は、その仏教的思想の影響もあいまって、莫大な資産をもとに社会事業を行う財団法人の設立を決心する。



宮城県図書館新館（明治40年竣工）
斎藤善右衛門の寄附により、勾当台東南角に建設。



報恩会設立認可の見直しを報じる記事
河北新報大正11年4月17日



斎藤善右衛門有成
(1854-1925)
〔斎藤善右衛門傳より〕

翁 門 衛 右 善 藤 齋

● 斎藤報恩会の設立

1921年（大正10）8月、善右衛門は斎藤家の家人に対して財団設立を訓示し、10月には宮城県図書館において財団創立評議会を開催、2年にわたる準備を経て、財団法人斎藤報恩会は、1923年（大正12）2月に文部省管下の財団法人として設立された。

1921年10月におこなわれた創立評議会で定められた「寄附行為」によれば、報恩会の事業は

- (1) 特定の学術研究所の設立及一般学術の研究に必要な設備並に研究費の補助
- (2) 産業発達に必要な施設
- (3) 国民思想の啓蒙善導及国家観念の涵養その他社会の幸福増進に必要な施設

とされ、斎藤善右衛門の寄附にかかる300万円を基本資金に設立された。この300万円の利子のうち「学術研究」に6割を、「社会施設」と「産業発達」に2割ずつを宛てる、というのが当時の配分方針であった。大卒初任給が50円という時代の話である。

A-1. 仙台医学専門学校生徒の成績証明書交付申請

1909（明治42）当館蔵／仙台医学専門学校『在学証明』

斎藤善右衛門から奨学金交付を受けていた仙台医学専門学校の生徒が、支給継続のため善右衛門宛てに提出する書類として成績等の証明を学校に申請していたもの。明治30年代半ば以降、中等・高等教育機関が全国で増設され上級学校への進学熱が盛んとなり、仙台でも仙台医学専門学校・仙台高等工業学校などが新たに設置され学生人口も増えていった。その一方で学費の調達に苦心する者も増え、各地方での奨学金の設立など育英事業の社会的役割も大きくなっていった。1902年（明治34）に斎藤善右衛門の育英貸費＝奨学金支給事業が始まる背景にもそう

した状況があった。

A-2. 斎藤報恩会設立許可書

1923年(大正12) 当館蔵/斎藤報恩会文書

財団法人斎藤報恩会の設立を、文部、農商務、内務各大臣が認可した文書。1900年代初め頃から教育振興や社会奉仕事業にその財を充てていた斎藤家の九代目当主善右衛門は莫大な財産は社会に還元するべきという考えに基づく「報恩主義」を貫き、東北帝大や地元の有力者らとの相談を重ね、1921年(大正10)に斎藤報恩会の設立を申請。1年3か月後の1923年(大正12)2月20日に設立が認可され、この認可を受けて財団法人斎藤報恩会が正式に発足した。東北地方の学術研究助成を目的とした斎藤報恩会のような財団は国内で前例がなく、その設立については全省庁の認可が必要であった。報恩会設立以後、この種の財団法人の認可が早まったと言われている。

A-3. 斎藤報恩会の設立文書(「寄附行為」)

1921年(大正10) 当館蔵/斎藤報恩会文書『法人関係書類』

1921年(大正10)10月12日、斎藤善右衛門は莫大な財産を社会に還元するという報恩主義に基づき、宮城県図書館において評議会を開催し、財団法人斎藤報恩会設立を宣言した。その際発表され、文部・内務・農商務の各大臣へ認可申請のために提出した報恩会設立の目的や基本規則を記した重要文書。

300万円という巨費を基金とし、財団法人の運営はその基金の利子などを充てることとした。事業費のうち、6割を学術研究事業、2割を産業事業、同じく2割を社会事業に分配していたことから、学術研究分野に重点を置いていた財団であることが分かる。東北大学との関連においても、文系理系を問わず、戦前は164件に対し約123万円を助成していたことから、斎藤報恩会が東北帝国大学の学術的発展に果たした貢献度は計り知れない。

斎藤報恩会の歴代理事長たちは、公益財団法人としての表立った活動のほとんどを理事や評議員に任せ、あくまで裏方に徹した。

〔2〕 斎藤報恩会と東北大学

B 斎藤報恩会と東北大学

B-0. 解説パネル→次ページ

B-1. 創立時代の学術研究総務部のスタッフ

1924年(大正13) 当館蔵/斎藤報恩会文書『法人関係書類』「事務関係事項」

報恩会学術総務部の事務体制を説明する書類。設立当時の学術研究総務部は一見してわかるようにそのほとんどすべてを東北帝国大学の事務職員が兼務し、事務局自体も、部長を務めた畑井新喜司が主任教授をつとめる理学部の生物学教室内(現在の放送大学宮城学習センター)に設けられていた。創設期の報恩会と東北帝国大学の密接な関係を物語る資料である。

一般庶務担当の嘱託として名前が見える小倉博氏は、のちに報恩会学術研究総務部の専任主事となり、また報恩会博物館の図書部長・学芸員として、畑井新喜司とともに学術研究総務部や博物館の中心的存在として活躍した。

斎藤報恩会と東北大学

●澤柳政太郎（元東北帝国大学総長）

斎藤善右衛門が財団法人設立に際し最初に相談した大学関係者は、東北帝国大学初代総長の澤柳政太郎とされている。

澤柳は1911年（明治44）から1913年（大正2）初頭まで東北帝大に在任したが、その後京都大学総長を経て官を辞し、斎藤報恩会設立の話が出る頃は東京で成城小学校校長を創立、同時に帝国教育会会長をつとめるなど教育界の大御的存在であった。具体的なことはよくわからないが、事業の構想を具体化する過程で、かつて仙台で面識を持った教育界の大御所・澤柳に相談にのってもらった、というところであろう。



●小川正孝 （東北帝国大学総長 化学者）

澤柳のアドバイスもあってか、その後報恩会の事業は、学術助成事業を最も重視した形で具体化されていき、地元仙台にある「東北帝国大学」の教授たちが深く関わっていくようになる。

当時総長であった化学者・小川正孝は、1921年（大正10）7月から8月ごろに善右衛門の相談を受け、仙台に「学術研究所」を創ることを進言したという（『河北新報』大正10年8月14日）。1917年（大正6）に東京に設立された「理化学研究所」には当時多くの東北帝国大学教授が携っており、おそらくこのような研究所がモデルとして小川の頭の中にあったのだろう。



●井上仁吉 （工学部教授 のち総長）

実際の事業方針の策定に大きな役割を果たしたのは、工学部の化学者・井上仁吉（のち第5代総長）であった。

井上は報恩会の事業に対する「意見書」をまとめ、「大学その他適当の場所に各種の研究室を分設して」、「学識有識者」からなる評議員会の決定により研究費を補給するというプランをまとめあげた。その過程で井上は、報恩会の理事となる中村梅三（七十七銀行専務取締役）・高木昶三（県会議員）など地元政財界の重鎮たちとともに斎藤邸で会合を重ねたという。

あまり目立たない存在の井上だが、実は影の主役と言い得る存在であった。



●評議員会・審査委員会と東北帝大の教授たち

報恩会の発足にあたり理事会・評議員会が設置されたが、評議員はその半数を東北帝国大学の教授が占めていた。

小川・井上のほか佐藤丑次郎（法文学部・憲法学）、熊谷岱蔵（医学部・内科学）、畑井新喜司（理学部・生物学／学術研究総務部長）はさらに「学術研究費補助審査委員」も兼ね、審査方針の検討などその後の学術助成事業を方向付ける役割を果たした。



佐藤丑次郎

熊谷岱蔵

斎藤報恩会評議員（大正14年度）

小川正孝（東北帝大総長）	熊谷岱蔵（医学部教授）
上田万平（宮城県知事）	杉村七太郎（医学部教授）
鹿又武三郎（仙台市長）	新保徳寿（仙台高工校長）
林鶴一（理学部教授）	菅原傳（衆議院議員）
畑井新喜司（理学部教授）	佐藤丑次郎（法文学部教授）
宮城音五郎（工学部教授）	佐藤長成（仙台市議）
井上仁吉（工学部教授）	齋藤永治
遠山郁三（医学部教授）	岡野義三郎（二高校長）

B-2. 小倉博と斎藤報恩会（パネル展示）

小倉は旧制二高・東京帝大出身で二高の教授を永くつとめた国文学者だが、宮城県第二高等学校（現在の仙台二華中・高等学校）校長を経て東北帝国大学法文学部助教授兼東北帝国大学事務官となった、異色の経歴を持つ。

報恩会では学術研究総務部の主事兼図書部長として手腕を発揮する一方、郷土の俳人や御国浄瑠璃の研究といった地域文化の研究にも力を注ぎ、1931年（昭和6）には阿刀田令造（二高教授、のち校長）やその他の郷土史研究科とともに「仙台郷土研究会」を設立、郷土史研究の発展に尽力した。

小倉は仙台実業家で歌人であった小倉長太郎（茗園）の長男で、その弟には国語学者の小倉進平（東大教授）、地質学者の小倉勉（旅順工大教授・山形大学長）、建築学者の小倉

強（仙台高工・東北大学教授）、植物学者の小倉謙（東大教授）といった学者たちが顔をそろえる。仙台を代表する学者一家でもあった。小倉強は、斎藤報恩会館や東北大学図書館（現史料館）の設計者でもある。

B-3. 斎藤報恩会仮事務所建設の件

1926年（大正15）当館蔵／斎藤報恩会文書『予算決算に関する書類』

仙台市内大聖寺裏門通（勾当台公園南東のちの斎藤報恩会館附近）に斎藤報恩会の仮事務所を建築するにあたって、東北帝国大学法文学部で不要となった建物の払い下げを申し出た書類。当時東北帝国大学では、法文学部の設置にともなって、現在の史料館など鉄筋コンクリートの新しい建物が建設された結果、旧制二高から引き継いだ木造建物のいくつかが不要となっており、その部材を近い将来の会館建設までの仮事務所用として使用することとした。この事務所建設に伴い、学術研究総務部の事務所も大学から独立することとなる。

C 畑井新喜司によるリーダーシップ

C-0. 解説パネル→次ページ

C-1. 畑井新喜司の演説「人類生物学の目的」

1926年（大正15）当館蔵／斎藤報恩会文書『時報』第一号

畑井は1926年10月16日、京都帝国大学で行われた日本学術協会第二回大会において、すでにロックフェラー財団と斎藤報恩会の提携によって開始されることが決まっていた人類生物学研究の目的について講演した。この中で畑井は、人類生物学とは人類に関する諸般事実を科学的に研究し、法則を見つけ出す学問であるとし、人類学、人類衛生学、優生学や民族心理学、そして人類の将来に対する諸問題の研究なども含むと述べている。

同じ時期には医学部教授であった長谷部言人の「日本霊長類の研究」（1923～1925）に総額8200円の学術研究費の補助や、理学部助手曾根広の「陸奥国夏泊半島石器時代人類遺跡の研究」（1926～1927）に140円の補助などが行われており、当時の人類生物学への関心の高さがうかがえる。

C-2. ロックフェラー財団客員教授コフォイドのサイン

1930年（昭和5）当館蔵／総務部総務課移管『芳名録』

1930年4月～8月の間来仙し、原生動物学の講義をおこなったカルフォルニア大学コフォイド教授とその妻が来学当初に残したとみられる署名である。サイン上部には、“With eager expectations for a mutually profitable and enjoyable period of service and deep appreciation of our cordial reception.”とあり、親日家であったというコフォイド教授の人類生物学講座に対する期待感がにじみ出ている。

コフォイド教授はプランクトン、とくにダイノフラジェラータ（渦鞭毛藻）の専門家であり、学生への講義とともに浅虫臨海実験所で、全国の高専以上の研究者に対し講習会も催し好評を博した。なお、ロックフェラー財団によるアメリカの生物学者派遣は慶應義塾大学医学部にも1920年代末から30年代にかけて同様に行われており、当時第一線級の生物学者が日本で教鞭を取ることで、同財団の目的であった世界の生命科学研究の推進と教育の一翼を担う意図があった。

斎藤報恩会と東北大学

●畑井新喜司（理学部教授 動物学者）

東北帝国大学理学部教授の畑井新喜司は、斎藤報恩会の評議員を始め学術研究総務部長、斎藤報恩会博物館長を兼任し、1940（昭和15）年に報恩会を去るまでの18年間、運営の陣頭指揮を執り続けた人物である。畑井はアメリカに留学しペンシルバニア大学附属ウイスター研究所教授に就任していたが、総長小川正孝に熱烈に請われて生物学教室の初代教授となった。斎藤報恩会においてもその渡米経験を生かして先進的な試みを積極的に行っていく。

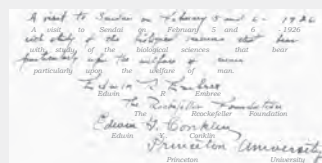


畑井新喜司によるリーダーシップ

ロックフェラー財団との連携事業（人類生物学講座）

畑井が主導した斎藤報恩会での試みとして有名なものに、アメリカのロックフェラー財団と連携した東北帝大の人類生物学講座がある。1926（大正15）年同財団研究部長のエムブリーが来日するととの情報を得た畑井は、生物学教室の大掃除をして彼を歓迎した。

その結果、生物学教室内にロックフェラー財団の人類生物学講座を開設する契約を交わす。契約内容は5年の間毎年アメリカから講師が来日し、旅費、滞在費、研究費として同財団が年1万ドル（当時の日本円で2万5千円）を交付する一方、斎藤報恩会が講師用住宅を提供するというもので、金額は当時の教室全体の研究費予算とほぼ同額であったという。エムブリーが来仙の際、斎藤報恩会を「ロックフェラー財団と相似たもの」と称したように（『河北新報』大正15年2月7日）、報恩会はアメリカの財団を意識して運営されていたとみられる。



〔日本語訳〕
1926年2月5日と6日、特に人類の福祉に関する生命科学の調査で仙台を訪問。
エドウィン・R・エムブリー ロックフェラー財団
エドウィン・Y・コンクリン プリンストン大学

本学に残されたエムブリーのサイン（芳名録）

当時人類生物学講座を受講した生徒の回想

ちょうどその年（註：1930年）には、ロックフェラー財団より、原生動物学のコフォイド博士がこられ、わたしたちは、英語の講義を受けた。これが他大学に進学した友人に対して、どんなにわたしにとって、大きな誇りであったことか。…

このような国際的な社交は、畑井先生にとっては、実に当りまえのことであつたらうが、われわれには、とくにわたしにとっては、はじめての経験で、こうしたエチケットや国際性に直接ふれることができたのは、畑井先生が別の意味での大教育者であることを、いまさらのごとく驚嘆するのである。

（永野為武「生物学研究室開学の鼻祖―畑井先生百態回想―」）



畑井とマクレドン
1932年自修会運動会にて

招聘された講師たち

招聘期間	講師	専門分野
1928年2月 ～1929年4月	ル・ブラン T. J. Le Blanc シンシナティ大学	人類生物学 統計学
1930年4月 ～1930年8月	コフォイド C. A. Kofoid カルフォルニア大学	原生動物学
1930年9月 ～1931年8月	チャイルド C. M. Child シカゴ大学	実験形態学 実験動物学
1932年4月 ～1933年1月	マクレドン J. F. McClelland ミネソタ大学	生化学
1933年4月 ～1934年3月	ムーア A. R. Moore オレゴン大学	動物発生学 動物生理学

D 斎藤報恩会博物館／南洋にかけた夢

D-0. 解説パネル→次ページ

D-1. 斎藤報恩会博物館時報

1931年（昭和6）当館蔵／斎藤報恩会文書

斎藤報恩会館への博物館の創設決定をうけて、1931年（昭和6）5月、日本各地の博物館関係者との連絡のために創刊された広報誌。毎月一回発行され、全国の博物館や図書館に配布された。

館長に就任した畑井新喜司は創刊号において、この博物館の目的を東北に関する学術研究とともに、科学知識を一般に普及させることであると定め、約100名の採集委員に東北地方の資料収集協力を呼びかけた。

初期には動植物・鉱物などの採集方法、その後は標本の収集報告や東北関係図書の目録作成の経過などが掲載され、収集した標本は動植物や鉱物のほか苔類や化石など多岐にわたった。

〔3〕 齋藤報恩会の学術助成

E 全体像

E-0. 解説パネル

齋藤報恩会の学術助成

1923（大正12）年から2006（平成18）年までに行われた575件に及び学術研究費補助のうち、東北帝大、東北大学、関連研究所は289件採用され、全体の半数以上に及んだ。共同研究に対する重点的補助と個人研究の採用がなされ、いずれも申請書の詳細な調査や面接を行い、さらに研究部長自らの研究室訪問、報恩会の理事会、評議会の審議を経て、最終決定にいたるもので慎重かつ公平な採用を目指したことがわかる。

昭和20年までの補助費総額ベスト10

研究題目	研究代表者	採用年	金額
1 電気を利用する通信法の研究	八木秀次 抜山平一 千葉茂太郎	1924～1929年	217,000円
2 低温研究	本多光太郎 青山新一	1929～1931年	121,900円
3 物質の磁性に関する研究	大久保準三 増本量	1932～1937年	81,000円
4 本学に設置せらるべき農学研究所における国外及雪害に関する研究	本多光太郎	1937～1939年	50,000円
5 地形地物の地震動に及ぼす影響に関する研究	中村左衛門太郎	1924～1930年	46,037円
6 西蔵仏典の研究	宇井伯舟 鈴木宗忠 金倉円照	1925～1928年 1930～1931年 1933～1934年 1938年	42,947円
7 原子及分子の構造に関する研究	大久保準三 高橋胖	1925～1927年	29,000円
8 ヴェント文庫購入寄附	佐藤丑次郎	1923年	25,000円
9 海産哺乳動物の研究	井上嘉郎治 岡崎克己他	1924～1927年	18,422円
10 糖尿病の研究	熊谷信蔵 佐武安次郎	1923～1927年	17,660円

戦前・戦中期の特徴

昭和恐慌が深刻化する以前の1930年ころまでが、報恩会が最も潤沢な資金に恵まれていた時期で、戦前の「共同的大研究」も多々みられる。補助を受けた研究分野は多岐にわたり理系・文系問わず有望な継続研究を支えるために「常識はずれ」の重点的な補助がなされたことで後に東北大学を代表する研究や研究所が生まれた。

戦後の特徴

終戦後、貨幣価値や株価の急落で、報恩会の基金の多くが紙くずとなり、事業存続も危ぶまれたが1951年補助事業を再開する。終戦前とは異なり生物学、地質学への補助が顕著となるが、これは博物館の運営を助成事業で補ったことによるとみられる。

東北帝大時代の研究補助分野の件数内訳

東北大時代の研究補助分野の件数内訳

E-1. 昭和6年度学術研究費申込書

1931年（昭和6）当館蔵／齋藤報恩会文書『会計関係書類』

報恩会設立当時、研究者たちから助成を求める応募が数多く寄せられた。これはその中から助成対象を決める昭和6年度の審査の際に使用された書類。申込書目次には、申込者・研究題目・申込金額・紹介者などが記載されている。申し込みにあたっては、報恩会の理事または評議員の紹介が必要だった。報恩会から最も多額の助成を受けた八木秀次らによる「電気を利用する通信法の研究」が、通し番号19番に記録されている。

所属学部や専門分野のバランスを考慮して組織された審査委員会は、共同的大研究を対象にし、継続的研究が望ましいものであるかなど、5か条からなる審査方針によって厳正な審査を行った。助成が決定した者は、毎年1回事業の経過や成績、経費収支の報告が義務付けられていた。

E-2. 斎藤報恩会で発行された雑誌

1924年(大正14)~1925年(大正15) 当館蔵/斎藤報恩会文書

斎藤報恩会で発行された『事業年報』、『ANNUAL REPORT OF THE WORK』、『時報』の創刊号である。

『事業年報』は報恩会における事業全般について記載したもので、邦文と英文の二種類が発行された。『時報』は月刊雑誌であり、報恩会関係者相互の連絡を保ち、意思の疎通を図ると共に、報恩会の状況を社会に報道するという機能を持っていた。創刊当初、邦文の『事業年報』は国内約250ヶ所、欧文のものは国内外約550ヶ所、『時報』は国内約500ヶ所におよぶ学校、図書館、研究所やその他の公共団体に無料配付され、積極的に研究や事業を発信していた。

F 人文・社会学系 ①

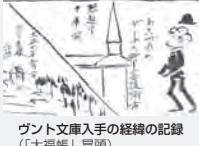

F-0. 解説パネル

斎藤報恩会の学術助成 —人文・社会科学系—

ヴント文庫購入 1923年 ¥25,000

斎藤報恩会の支援を最初にうけたのは、ドイツの著名な心理学者 W. ヴント Wilhelm Wundt (1832-1920) の旧蔵書購入である。心理学・哲学関係を中心に、幅広い学問分野の資料からなり、カントやライプニッツ、スピノザの初版本、当時の科学者たちの交流を伝える多数の論文別刷などを含んでいる。



東北大学の初代心理学教授となった千葉胤成が、エール大学やハーバード大学など、欧米の著名な大学との争奪戦を制し購入に成功した。その様子は、彼の残した「大福帳」などで知ることができる。

ヴント文庫入手の経緯の記録 (「大福帳」冒頭) 千葉胤成 (1884-1972)

狩野文庫(洋書) 購入 1924年 ¥20,000


狩野文庫は、狩野亨吉が収集した和漢書古典のコレクション。初代総長の沢柳政太郎が狩野の古くからの友人であった縁で、東北大学創設期にまず7万冊(1912年)、その後(1923・1929・1944)も含め計4回にわたり納入され、東北大学所蔵書籍の白眉となった。1924年(大正13)の洋書購入は、第1回受入時に図書館長だった数学科教授林鶴一の名前で行われた。現在狩野文庫の一部となっている洋書が該当すると思われるが、なお調査を要する。

林鶴一 (1873-1935) 狩野亨吉 (1865-1942)

スタイン文庫購入 1924年 ¥13,200


ドイツの民事訴訟法および刑法学者で、ライプツィヒ大学教授であったフリードリッヒ・スタイン Friedrich Stein(1859-1923)の旧蔵書6,810冊からなるコレクション。民法、商法、民事訴訟法、破産法、刑法等法律全般に関する図書、雑誌、小冊子を含む。



図書館の受入簿
ヴント文庫・スタイン文庫・西蔵大蔵経についての記載を持ち、背表紙に「報寄」(斎藤報恩会寄附)の文字が入る。

まぼろしのデルボー文庫 1923年 ¥5,000

ヴィクトル・デルボー Victor Delbos (1862-1916) バリ・ソルボンヌ大学教授)の旧蔵書約3千800冊である。内容は、哲学・倫理学・社会学などが中心となる。3万フランで契約し通関手続き中の横浜で、1923年(大正12)9月1日の関東大震災に遭遇した。保険金により損失は千円程度と見込まれたが、貴重な資料は残念ながら全て失われ、わずかに購入リストが残された。



パリ東部パール・ラフエール墓地のデルボー墓碑

F-1. 大福帳

1933年(昭和8)頃当館蔵/千葉胤成文書(原本は文学研究科心理学研究室所蔵)

東北大学文学部心理学研究室内の諸事を綴った「大福帳」の複製であり、ヴント文庫を入手するまでの経緯が記されている。1922年(大正11)京都帝国大学助教授でドイツに留学していた千葉胤成(ちば たねなり)は、ヴントの死後、ドイツのローレンツ書店から売り出されたヴント文庫の獲得競売に勝利した。帰国後に東北帝国大学心理学教室の初代教授に就任することが決まったため、購入した文庫は同大学に所蔵された。展示箇所右側には、新設大学であった東北帝国大学に文庫を寄贈するという「決心!」と、当時の文庫の値段が確認できる。

競売後なかなか資金を工面できず、支払いが完了するまでに1年以上を要したが、1923年（大正12）に斎藤報恩会から受けた支援によってヴント文庫を入手することができた。斎藤報恩会による寄付がなければ、ヴント文庫購入による附属図書館の会計は収拾がつかない状況であり、報恩会の支援は図書館と法文学部の発展に大きく寄与したと言える。

F-2. デルボー文庫購入の顛末 1923年（大正12）当館蔵／斎藤報恩会文書『報恩会会計報告』

「大正拾二年度 事業ノ状態」と題された書類の一部。当該年度に斎藤報恩会から受けた研究者などが、研究題目ごとに目的や補助金額および事業の状態を書き上げた内容を連ねる。

「東洋美術ノ研究 福井教授」に続き、展示箇所「デルボー文庫購入 佐藤教授」がある。デルボー旧蔵書の価格（3万仏フラン＝400英ポンド＝4千円で換算）や、横浜港で関東大震災に遭遇し「全部ヲ焼失」した事など、他の記録に見られない詳しい情報が記されている。

G 人文・社会学系 ②

G-0. 解説パネル

斎藤報恩会の学術助成 — 人文・社会科学系 —

宇井伯寿・鈴木宗忠・金倉円照（法文学部）
西蔵仏典の研究 1925～38年 ￥42,947

近代に入り、西洋の仏教学が流入する中で、漢訳仏典しか知らなかった日本人たちの間で、もっとも原型に近い仏教を求める機運が高まった。インドでは13世紀に仏教が滅び、チベット仏教が古い形を残した仏教と見なされたが、当時のチベットは鎖国体制をとっていたため、その地の大蔵経の入手は大変困難だった。

そうした中で、数奇な運命により10年間現地で修行を積んだ多田等観（1890-1967）は、デルゲ版西蔵大蔵経（もっとも整ったチベット仏教経典）など貴重な資料を伴って1923年（大正12）に帰国し、その後東北大学の教員となり、同僚たちと斎藤報恩会の援助を得て目録を整備した。その功績によって、多田等観と関係者に対し、1955年に日本学士院賞が授与された。



ラサ滞在中の多田等観
(後に東北大学講師)



宇井伯寿
(1882-1963)



金倉円照
(1896-1987)



デルゲ版西蔵大蔵経

喜田貞吉・古田良一ほか（法文学部）
奥羽史料の調査研究（喜田・古田ほか）1925～29年 ￥7,850
秋田子爵家史料の整理（古田）1942～43年 ￥2,200

1925年（大正14）東北地方の史料収集・調査を目的に法文学部内に設置された「奥羽史料調査部」の事業への助成。

「奥羽史料の調査研究」事業は、法文学部で古代史及び考古学を担当した喜田貞吉を中心に、東北における古代遺跡の調査・資料収集や雑誌『東北文化研究』の刊行などを実施。亀ヶ岡式土器の優品で知られる久原コレクション（文学部所蔵）など縄文時代から古代にかけての重要考古学資料が収集された。

1930年代以降は古田を中心に中世・近世史料の収集・整理を精力的に行った。「秋田子爵家史料の整理」は1939年（昭和14）に本学に寄託された、津軽安藤氏の系譜を引く旧三春藩主秋田家の文書でやはり本学所蔵古文書の代表的存在である「秋田家史料」（附属図書館蔵）の整理研究。古田の下で副手をつとめ、のち東北中世史研究の開拓者と評価された大島正隆が整理を担当した。



喜田貞吉
(1871-1939)



古田良一
(1893-1967)



大島正隆
(1909-1944)



青森県十腰内遺跡
出土土器
(久原コレクション)



三十六歌仙絵
(秋田家史料)

G-1. 西蔵大蔵経の寄附願及び承諾書

1927年（昭和2）当館蔵／総務部総務課移管『昭和二年以降 寄附関係書類』

斎藤報恩会による東北帝国大学への寄附願と、それに対する東北帝国大学総長からの承諾書。当時きわめて入手困難であったチベットの仏教経典・デルゲ版西蔵大蔵経などの寄附を申し出ている。

デルゲ版大蔵経は、仏教発祥の国インドで既に失われてしまった古い仏教の形を残しており、当時鎖国状態にあったチベットの門外不出の経典であった。秋田出身でチベットに潜入した僧

侶・多田等観（ただとうかん）がダライラマ13世から下賜される形で入手。その学問的価値を見込んだ斎藤報恩会が多田から購入し、東北帝国大学法文学部に寄附した。寄附を受けた法文学部印度学教授・宇井伯寿らは多田とともに大蔵経の研究にあたり、1934（昭和9）年、世界初のデルゲ版西蔵大蔵経の総合目録「西蔵大蔵経総目録」を刊行した。

斎藤報恩会による西蔵仏典研究への学術助成は、人文科学系への助成としては最も高額な支援であった。斎藤報恩会の援助は理系分野での功績に注目されることが多いが、人文社会系の学問にも惜しみなく行われていた。

G-2. 考古学遺物の寄附についての具申書と謝状案

1927年（昭和2）当館蔵／総務部総務課移管『昭和二年以降 寄附関係書類』

北海道や岩手県の考古学遺物所蔵者から東北帝国大学に対し、寄附の意向を申し述べる書類と、それに対する総長からの感謝状の文案。両者を仲介した喜田貞吉（きたさだきち 1871-1939）によって作成され、「具申書」には総長以下、事務担当者などの承認印が押されている。

喜田は徳島県出身の歴史学者で、東京帝国大学卒業後、1909年（明治42年）に「平城京の研究・法隆寺再建論争」により文学博士を授与された。その法隆寺再建・非再建をめぐる論争や、文部省勤務時代の南北朝正閏問題論争で、喜田は学界以外にも広く名を知られていた。


東北帝国大学に法文学部が設立されると、喜田は京都帝国大学文学部から異動し、仙台の地で北方の古代史や考古学に関する多くの業績を残した。その際に広範な活動を支えたのが、斎藤報恩会の多額の援助であった。

H 人文・社会学系 ③

H-0. 解説パネル

斎藤報恩会の学術助成 —人文・社会科学系—


栗生武夫・石田文次郎
民法の歴史的比較的研究
(チーテルマン文庫購入等)
1926年 ¥12,000



チーテルマン文庫の蔵書票

法文学部民法学講座の初代教授石田文次郎が法史学の栗生との連名で受けた助成。
石田のドイツ留学中、国際私法の大家 Ernst Zitelmann (1852-1923) の夫人が同教授の没後蔵書の譲渡先を書店を通じ探していることを知り、これを入手し研究をおこなった。蔵書はチーテルマン文庫として附属図書館に収められている。

小林好日
東北方言の研究
1940～47年 ¥6,277



小林好日 (1886-1948)

法文学部国語学講座の教授で、方言研究の開拓者として知られる小林の研究への助成。
東北各地 2000 箇所からの収集データをもとに方言の臨地調査を実施。語彙・語法やアクセントなどの精緻な分析から北奥・南奥方言の境界論など東北方言の言語地理学的研究を実施。その一部は『東北方言の方言』（1944年三省堂）として公刊。

文科系研究に対するその他の助成研究(戦前・戦中期のみ)

欧州に集蔵せる東洋美術の研究 (1923)	福井利吉郎(法文学部)	¥2,400	東北地方に残存する古代演劇の研究 (1934～37)	小宮豊隆(法文学部)	¥8,800
欧州に集蔵せる東洋美術品中珍稀優品撮影 (1924)	佐藤丑次郎(法文学部)	¥2,000	敦煌古写本の研究(1935)	武内義雄(法文学部)	¥1,000
支那法制用語の研究(1924～28)	東川徳治(図書館)	¥4,565	奥羽地方農村経済史の基礎的研究 (1928～34)	中村重夫ほか2名(法文学部)	¥3,000
仙台湾の法制の研究(1931～33)	栗生武夫・高柳真三(法文学部)	¥6,000	明治維新以後における東北地方治水耕地整理事業の研究(1929～31)	木下影(法文学部)	¥1,920
仙台市小学校児童の一般知能検査 (1931～40)	千葉胤成・大脇義一・栗林宇一(法文学部)	¥1,585	東北地方に於ける社会環境と法律生活の実証的研究(1939～40)	中川善之助(法文学部)	¥1,400
奥羽海運史の研究(1931～46)	古田良一(法文学部)	¥4,000	東北六県の県庁所在地たる都市小学校児童並中等学校生徒の知能検査に就て(1941～48)	大脇義一・栗林宇一(法文学部)	¥7,420
国民知能検査を基礎としての個性研究及血液型と知能並びに気質との関係に就ての研究(1933～35)	千葉胤成・大脇義一・栗林宇一(法文学部)	¥2,545	仙台文化史料の研究(1942)	常盤雄五郎(図書館)	¥260

H-1. 臨愷愷之女史箴図巻**1923年（大正12）附属図書館所蔵**

中国古代（東晋時代）に顧愷之（こがいし 4世紀後半活動）が描いたといわれる『女史箴図巻（じょししんずかん）』（大英博物館所蔵）を元に、日本画家の小林古径（こばやし こけい 1883-1957）と前田青邨（まえだ せいそん 1885-1977）が作成した絵画。単なる模写の域を超え、大正期絵画の代表作の一つと評される。

書名の「女史」は後宮の女官、「箴」は戒めの文という意味。西暦300年頃の中国で、専横を極めた当時の皇后一族をいさめるため、張華という人物が自らを女官に擬して「女史箴」の文章を著し、婦人の徳を説いた。後にそれを、顧愷之が絵画化した。

帰国後に東北帝国大学で美術史の教授になる予定だった福井利吉郎（1886-1972）は、斎藤報恩会の支援を得て在外美術作品の調査等を進めていた。彼が欧州に滞在していた両画伯に、大英博物館の図の模写を依頼した結果、本作品が生まれた。報恩会の援助により、東北大学は貴重な美術資料を収蔵するに至ったといえる。

H-2. 方言語彙学的研究 4冊**1948年（昭和23）以前当館蔵／小林好日文書**

小林好日（こばやし よしはる 1888-1948）最後の著書の肉筆原稿。B5の原稿用紙に記され綴じられている。

小林は東京生まれの国語学者で、1922年（明治45）に東京帝国大学を卒業後、後に『国語学概論』（1930年）、『日本文法史』（1936年）などに収められた研究を進め、1934年（昭和9）に東北帝国大学の法文学部に赴任した。仙台に移った後は東北方言の調査・研究にもとりくみ、『東北の方言』（1944年）刊行後も成果を蓄積したが、3月の定年退官を目前にした1948年（昭和23年）2月に急逝した。遺稿に、京都大学に提出されていた博士論文を加え、1950年（昭和25）に岩波書店から刊行されたのが『方言語彙学的研究』である。

本書は、方言地理学的と文献国語史を融合させた点に新しさが認められる一方、東北の方言地図が少ないという指摘もある（馬淵良雄、徳川宗賢など）。いずれにしても、各地の方言が急激に減りつつある現状を考えるなら、この時点でなければ得られなかった知見や分析という観点からも、貴重な研究といえるだろう。

I 自然科学系 ①**I-0. 解説パネル→次ページ****I-1. 宇田式超短波長無線電信電話機 発信機及び受信機****1933年（昭和8）当館蔵**

「電気を利用する通信法の研究」の成果のひとつとして宇田新太郎が発明し、合資会社日電商会によって生産販売された超短波無線電信電話機。

宇田は短波長ビームの研究で八木・宇田アンテナの原理を発見・開発したことで有名だが、同時にこれを利用した超短波（VHF）や極超短波（UHF）による無線通信の実用化研究を進めたことでも知られる。宇田は特にVHF波による通信の実用化研究に力を注ぎ、仙台－金華山での通信実験、山形県酒田－飛鳥間での通信実験等の過程で無線電信電話機の改良を重ねこれを完成させた。特に、酒田・鳥間での実験成功には仙台通信局がいち早く着目し、翌昭和8年4月から酒田郵便局・飛鳥郵便局間の無線電話の実用化に着手、同年11月21日に一般通話が始まった。日本で初めて、超短波を利用した無線電話が実用化された。

斎藤報恩会の学術助成 —自然科学系—

八木秀次・抜山平一・千葉茂太郎 (工学部電気工学科)

電気を利用する通信法の研究

1924～29年 ¥217,000

斎藤報恩会の助成事業中、最も多額の助成を受けた共同研究。テレビアンテナとして世界中に普及した「八木・宇多アンテナ」、電子レンジの技術に連なる分割陽極マグネトロンなどの発明をはじめ、有線・無線通信、音響的通信の研究など多くの成果を挙げ、論文数は500以上といわれる。

日本の弱電工学研究を飛躍的に発展させたこの共同研究は、同時に東北大学に「電気通信研究所」が誕生する基盤となった。八木らは助成期間満了にあわせ研究所の設置を国に要求し始めるが、それはこうした研究成果とともに、助成によって整備された研究設備の充実を踏まえたものであった。計画はその後1935年に実現。現在も引き続き日本を代表するエレクトロニクス研究の一大拠点となっている。



八木秀次



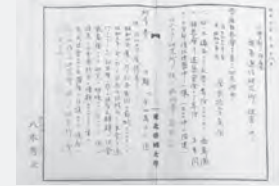
抜山平一



岡部金治郎



宇田新太郎

八木・宇田アンテナを初めて実用化した
極超短波無線送受信機八木秀次による「電気通信研究所」計画
(1928年12月 評議会議事録)

本多光太郎・青山新一 (金属材料研究所)

低温研究

1929～31年 ¥121,900

当時金属材料研究所所長であった本多光太郎が、超低温環境での現象(たとえば超伝導現象など)を扱う「低温科学」の将来性・重要性を見越し、先進地であるヨーロッパの低温科学を留学中に学んだ新進の化学者・青山新一を金研に受け入れ、連名で助成を受けたもの。

この助成で国内最先端の設備をそろえた「低温研究室」が金研に整備された。青山はその助手の神田英蔵らとともに日本の低温研究の草分けとして新しい領域を切り拓いていった。

金属材料研究所低温研究室
(1933年ころ)

青山新一



神田英蔵

大久保準三 (理学部)・増本量 (金属材料研究所)

物質の磁性に関する研究

1932～37年 ¥81,000

かつて本多光太郎が手がけた「KS磁石鋼」等の成果を生み出した研究を発展的に継承した、理学部物理教室と金属材料研究所の組織的共同研究。大久保・増本はともに本多の弟子にあたる。

金研はこの助成をもとに新研究室を建設し、1934年に、KS鋼の4倍の保磁力を持ち世界最強と称された「新KS鋼」を開発。これらの研究は計測機器の性能を向上させ工業発展に大きく寄与した。



本多光太郎



大久保準三



新KS鋼



増本量

I-2. 低温研究室建物の寄附願及び平面図

1929年(昭和4)当館蔵/総務部総務課移管『昭和二年以降 寄附関係書類』

東北帝国大学総長井上仁吉に宛てて、低温研究室の建物を寄附する文書。施設設備総費用約15万円のうち、12万1900円に上る巨額の補助を報恩会が行った。書面上では「低温研究所」と記されている。

オランダやドイツの低温研究施設を視察した青山新一理学部助教授(のち金研教授)の知見をもとに、低温度における金属の研究に必要な、気体を液化する技術・設備が整えられ、さらに火災爆発などの危険防止策、耐久性、美観にも配慮した建物が設計・建設された。国内初の低温研究所であった。

J 自然科学系 ②

J-0. 解説パネル

斎藤報恩会の学術助成 —自然科学系—

中村左衛門太郎 (理学部)
地形地物の地震動に及ぼす影響に関する研究 1924～30年 ¥46,037
地磁気及地電気に関する研究 1933～36年 ¥7,360

東北帝大赴任直前に中央気象台で関東大震災に遭遇した中村は、仙台赴任後、その苦い経験をふまえ、地磁気や地電流の観測を通じた地震予知研究を志し助成を受けた。
 震災で被害を受けた熱海トンネルや足尾銅山の坑道、十勝岳火山など各所に観測装置を設け、またより高い精度の観測を行うための地震計の開発などをおこなった。
 中村はその後、1933年からも3年間「地磁気及地電気に関する研究」の助成を加藤愛雄との連名で受け、引き続き地磁気や地電と地震の関連について研究するとともに、生物学科が行うナマズの外的刺激研究とも連動して多角的な地震予知研究を展開した。



中村左衛門太郎



昭和8年三陸津波地震の記録



水平動地震計設計図



向山観測所の地震計

田原正人・朴沢三二・小久保清治ほか (理学部)
陸奥湾における生物の分布研究 1926～44年 ¥14,150

1924年に設置された理学部附属浅虫臨海実験所を拠点に、田原(植物学)、朴沢(動物学)、小久保(浮遊生物学)の3教授を中心にして行われた研究。中断を挟みつつも長期にわたって財団の助成が行われた。陸奥湾に生息する生物を総合的に解明しようという協同研究で、東北大学のみならず学内外多数の生物学者を総動員して標本の収集・検討を行い、新種も数多く発見された。同実験所が海洋生物学の共同研究拠点として発展していく基礎を築いた研究でもある。
 なお小久保は1932年から「魚類の外圍の状態の変化に対する反応の研究」の助成も受け同実験所を拠点に研究。これは上記の中村左衛門太郎の地震予知研究と連携したものであった。



小久保清治



朴沢三二



田原正人

熊谷岱蔵ほか (医学部)
結核病の病原菌的分類に関する研究 1933～37年 ¥17,660

熊谷岱蔵教授以下、海老名敬明、中村隆といった医学部内科教室の面々によっておこなわれた共同研究。熊谷はこれ以前にも「糖尿病の研究」で報恩会の助成を受けていたが(1923～27)、それが一段落すると、大正期以降社会的に大きな問題となっていた結核の研究に本格的に着手。報恩会から再度助成を受け、結核菌の培養方法、結核菌の育環境、脂肪酸・紫外線や赤外線・血液等の結核菌への影響など結核菌に関する基礎研究を進め、結核治療の進化に重要な知見を得た。これらを含む熊谷の結核研究などを基礎に、1940年には東北帝国大学に抗酸菌病研究所が誕生。その歴史は現在の加齢医学研究所へと連なっている。



中村隆



海老名敬明



熊谷岱蔵



抗酸菌病研究所

K 自然科学系 ③

K-0. 解説パネル→次ページ

K-1. 東北帝国大学農学部設置趣意書 1932年(昭和7)当館蔵/総務部総務課移管文書

1931年(昭和6)前後の凶作や経済恐慌などにより農村救済の気運が高まる中、1932年(昭和7)12月、東北帝国大学総長である本多光太郎や仙台の政財界の要人の連名で書かれた農学部設置に関する趣意書。斎藤善右衛門(十代目斎藤善右衛門有道)もその一人として名前を連ねている。

農業地帯でありながら自然条件に恵まれず、産業開発も遅れていた東北地方では、科学研究による地域に適した農産物の改良発展を進めることが重要であると指摘し、農学部新設の必要

齋藤報恩会の学術助成 —自然科学系—

本多光太郎総長

本学に設置せらるべき農学研究所における冷害及雪害に関する研究

1937～40年 ¥50,000

東北帝国大学農学研究所の新設を目的とした助成。このため、当時東北帝国大学総長だった本多光太郎への助成という形をとっている。冷害・雪害対策の研究は研究所の中心的な研究課題として強調されていたものであり、初代所長寺尾博以下農研教授陣に課された課題であった。

大正末年以来、「東北振興」策の一環として東北帝国大学に農学部を設置する計画が地元政財界の支援を得て展開されており、齋藤善右衛門も賛同者に名を連ねていた。1937年、県・市や民間からの寄付を前提に、「農学研究所」という形で設置が決定すると、住友家などとともに齋藤報恩会も寄付を決定。1939年に研究所が発足して以降もたびたび報恩会から農研研究者への助成がおこなわれている。研究所はその後1988年まで存続。現在の東北大学生命科学研究科の源流の一つとなっている。



寺尾博 初代所長



農学研究所本館 1943年竣工

その他の主な助成研究(戦前・戦中期のみ)

好鉄性生物の研究及乾燥致死せしめたる葉緑体の炭素同化作用の研究(1923)	ハンス・モーリッシュ(理)	¥4,000	神経系統の生物学的並形態学的研究(1927)	木村男也・那須省三郎ほか(医)	¥3,000
古生物標本寄附(1923)	松本彦七郎(理)	¥8,000	液体に依るガスの吸収速度の研究(1928～34)	八田四郎次(工)	¥3,750
有用鉱物の物理学及化学的研究	神津敏祐(理)	¥6,000	光覚生理学の研究(1928～29)	藤田敏彦・細谷雄二(医)	¥2,200
石炭の構造研究(1923～25)	岩崎重三(工)	¥14,000	非経口的栄養素として脂肪の応用の学理的的研究(1929～31)	山川章太郎・野村利治(医)	¥4,000
日本霊長類の研究(1923～25)	長谷部晋人(医)	¥8,200	植物成分の化学的研究(1929～33)	真島利行	¥2,300
日本群島と支那大陸との比較地史学的研究(1923～25)	早坂一郎(理)	¥7,867	本邦火山の研究(1929-34)	神津敏祐(理)	¥5,945
イニシアル・ストレス測定法の研究(1923～25)	小門専治(工)	¥7,000	三体問題における週期軌道の数値的研究(1930～33)	松隈健彦(理)	¥3,000
耳鼻炎性頭痛蓋内合併症に就て実験的研究(1923～25)	和田徳次郎(医)	¥4,000	内燃機関の瞬時温度測定の研究(1934～45)	前川道治郎(工)	¥3,300
乳児幼児の治療食餌及乳幼児の新陳代謝的研究(1923～25)	佐藤彰(医)	¥4,300	学校児童の身体発育に関する衛生学的研究(1934～43)	近藤正二・阿部弘毅(医)	¥2,250
細菌の免疫学的分類研究(1923～25)	青木正児(医)	¥5,800	X線吸収限界の研究(1936～38)	林威・山田光雄(理)	¥3,268
糖尿病の研究(1923～27)	熊谷信蔵・佐武安太郎(医)	¥7,000	和算の研究(1936～38)	藤原松三郎(理)	¥2,100
関東大震と地質構造との関係研究(1924～27)	矢部長克(理)	¥15,115	銅と水稲生育との関係研究(1936～39)	井上嘉都治ほか(医)	¥4,870
青化物の(1923～28)	原龍三郎(工)	¥9,640	北上山地南部の地質及地史の研究(1937～41)	稲井豊(理)	¥5,675
調帯による動力の伝達に関し学理的並実験的研究(1924～26)	砂谷智導(工)	¥7,000	日食時におけるコロナスペクトル及光スペクトルに関する研究(1938～40)	松隈健彦(理)	¥8,000
海産哺乳動物の研究(1924～27)	井上嘉都治・岡崎克己ほか(医)	¥18,442	無機化合物反応の電気化学的研究(1940～47)	石川総雄・木村原(理)	¥4,912
原始及び分子の構造に関する研究(1925～27)	大久保淳三・高橋幹(理)	¥29,000	太陽副射熱に関する研究(1941～42)	加藤愛雄(理)	¥3,500
胸腔及内臓の外科的研究(1927～28)	関口蕃樹(医)	¥4,500	重要水産物種苗生産に関する研究(1942～47)	今井丈夫(農研)	¥17,200
特殊鋼の物理冶金学的研究(1927～30)	村上武次郎・武田修三(工)	¥4,500	東北地方夏作雨害の生理生態及栽培学的研究(1943～45)	山本健吾ほか(農研)	¥4,000
電気絶縁物の研究(1927～30)	三枝彦雄・望月重雄(理)	¥6,200	馬鈴薯の研究(1943～47)	水島守三郎(農研)	¥4,088

性が主張されている。しかし不況による就職難を理由に農学部の設置は難しく、設置運動はやむなく研究所の設置を方向転換。1936年(昭和11)から農学研究所の設置が国に提出され、齋藤報恩会などの寄付を受けて1939年(昭和14)に研究所が設置された。東北大学に農学部が設置されたのは、終戦後の1947年(昭和22)のことである。

K-2. 齋藤報恩会から医学部への研究機器等の寄附文書

1927年(昭和2)当館蔵/総務部総務課移管『昭和二年以降 寄附関係書類』

医学部の教授たちへの助成の一環として齋藤報恩会が購入した機器・標本等を大学に寄付する書類。

那須省三郎教授「組織体外培養による細胞病理の研究」、木村男也教授「末梢神経系統の研究」、井上嘉都治教授「海産哺乳動物の研究」等の研究助成金で購入したものと見られる。事務手続き上は、報恩会の側が寄付を願い出、大学がそれを「承諾する」という関係になっている。

報恩会の助成金による資料や機器の購入は、個々の研究を助けるだけでなく、東北帝国大学の研究環境そのものを整えていくうえでも、きわめて大きな役割を果たした。

〔4〕「学都仙台」と斎藤報恩会

L 「学都仙台」と斎藤報恩会

L-0. 解説パネル

「学都仙台」と斎藤報恩会

報恩会の学術助成は、東北帝国大学に限らず東北地方の研究者に対し広く行われ、旧制二高をはじめとする「学都仙台」の研究者たちも多数助成を受けている。これらは「学都仙台」や東北地方における学術研究の裾野を広げると同時に、地域の実情に応じた研究、地域そのものを対象にした研究・教育を促進し、地域文化の向上という面でも独自の役割を果たした。

阿刀田令造（二高教授・校長）ほか

旧仙台藩史料編集（1923～28年 仙台叢書刊行会 ¥13,750）

旧仙台藩古絵図研究（1928～30年 浜田廉と ¥800）

宮城県の飢きんに関する研究（1935～37年 ¥700）

仙台藩幕末財政史の研究（1938～40年 伊東信雄と ¥2,760）

旧制第二高等学校の歴史科教授・校長で、仙台郷土研究会の創設など仙台の地域史研究振興でも知られる阿刀田令造も、斎藤報恩会の助成を受けながら資料収集・研究を進めた。報恩会のスタッフであった小倉博や在野の郷土史家らとの共同で編集刊行した『仙台叢書』、仙台藩古絵図の研究などは、現在でも仙台の地域史研究に欠かせないものとなっている。



阿刀田令造

有井癸巳雄・永澤信・野邑雄吉（二高教授・のち東北大学教授）

東北地方温泉の研究（1941～47 有井癸巳雄・永澤信 ¥6,540）

鬼首間欠泉の研究（1941-49 野邑雄吉 ¥7,511）

「支倉焼」の書家として仙台市民に馴染みの化学者・有井癸巳雄（凌雲）ら二高の理科教授たちへの助成だが、同時に二高科学部の研究テーマともされ、学徒動員等による中断を挟んで、戦中から戦後も継続。科学を志す生徒たちが数多く参加した。



科学部の鬼首合宿で生徒たちと有井（二列目左端）・野邑（前列中央）



鬼首の間欠泉研究室

東北帝大以外の仙台の研究者に対するその他の主な研究助成（戦前のみ 抜粋）

史記考証編集(1923～25)	☆ 瀧川亀太郎(第二高等学校教授・漢文)	¥4,000
珪素金属合金を基とする安母尼亞製造の研究(1923～25)	武藤盛勝(仙台高等工業学校教授・化学)	¥8,000
セメントの研究(1923～27)	内田麥郎(仙台高等工業学校教授・土木)	¥6,000
言語学新生面の研究並に日本語の系統に関する研究(1924～28)	岡沢鉦治(第二高等学校教授・国語学)	¥14,000
短柱の理論についての研究(1931～42)	結城朝恭(仙台高等工業学校教授・建築)	¥8,200
陰極線による金属の薄膜構造の研究(1938～43)	☆ 白井俊二(第二高等学校教授・物理)	¥7,867
腐蝕性物質の蒸気圧の測定(1939～46)	☆ 有井癸巳雄(第二高等学校教授・有井)	¥7,000
倍数植物育成に関する実験的研究(1939～48)	★ 小野知夫(第二高等学校教授・生物)	¥4,000
関東東北に遺存された古代楽器と歌謡についての研究(1940～47)	館山甲午(宮城女子師範学校教諭・音楽)	¥4,300
東北地方における防疫史の研究(1943～48)	★ 青木大輔(宮城県衛生研究所)	¥5,800
宮城県下児童語の研究(1944～47)	★ 石母田英治・阿部三郎(宮城女子師範学校教諭・国語)	¥7,000

※ ★は、本務校との兼務ないし学制改革により東北(帝国)大学に在職した経験を持つ研究者 ☆は東北(帝国)大学を卒業した研究者

L-1. 仙台叢書刊行についての助成申込文書

1924年（大正13）当館蔵／斎藤報恩会文書『大正十三年度 執務文書』

『仙台叢書』第3・4巻刊行経費の助成を申請したもの。申込者兼紹介者の鹿又武三郎は、当時の仙台市長。

『仙台叢書』は、旧仙台藩関係史料の散逸防止と藩政時代文化の後世への伝承を目的に編纂・

刊行された資料集。明治中期から昭和戦前期の間に3期にわたる編纂・刊行がおこなわれたが、このうち最も規模が大きい第2期目（1922～29）の刊行が、斎藤報恩会の助成によっておこなわれた。仙台叢書刊行会は伊達家当主を総裁・県知事や市長を会長・副会長に、仙台の政財界の重鎮を顧問にいただき、斎藤善右衛門は、このうち顧問の一人に名を連ねていた。岩沼在住の医師鈴木省三（雨香）らの郷土史研究者らを阿刀田令造・小倉博らがサポートする形で編纂がおこなわれ、歴代藩主の記録、文学・歴史・地理・法制など広汎にわたる文献を別集あわせ全22冊に収録した。

L-2. 第二高等学校北六番丁校舎落成記念『仙台古地図』 1926年（大正15）10月発行当館蔵

L-3. 阿刀田令造著『仙台城下絵図の研究』

1936年（昭和11）8月発行当館蔵／斎藤報恩会文書

阿刀田令造の仙台城下絵図研究は、旧制二高の北六番丁校舎（現東北大雨宮キャンパス）落成式に記念品として配布した『仙台古地図』の編集時にはじまるという。その後興味を深めた阿刀田は、同校歴史科教授の濱田廉と共同で1928年から3年間斎藤報恩会の助成を受け研究を進めた。ここに展示している『仙台城下絵図の研究』は助成終了後の知見を加え斎藤報恩会博物館図書部研究報告として刊行されたもので、戦災等で現在では失われている資料も収録しており、近世仙台城下研究の基礎資料として現在もなお重要な価値を持ち続けている。

L-4. 阿刀田令造日記

1946年（昭和21）9月15日当館蔵／阿刀田令造文書『自由日記 昭和二十一年』

九月十五日条の四行目に「常盤氏の本を研究費を以て買取ること」と見える。「常盤氏」は宮城県図書館や東北帝国大学附属図書館に司書として永く在職し、郷土史研究者として戦後の『仙台市史』編纂などにも携わった、常盤雄五郎（1867～1956）のこと。常盤氏が個人で収集した郷土史資料を、阿刀田が紹介する形で斎藤報恩会が購入した件についての記事と見られる。常盤の蔵書はその後「常盤文庫」として報恩会が所蔵した。

斎藤報恩会は、小倉博が中心となって報恩会自身でも郷土史資料の収集を行っていたが、1945年7月の仙台空襲によって少なからぬ資料が失われており、常盤文庫の購入にはこれを補う意味もあった。

〔5〕 斎藤善右衛門演説

M. 斎藤報恩会創立評議会での斎藤善右衛門演説より（パネル展示）

寄付行為の件に付毎度御高教を蒙りたる結果、財団法人組成の事となりまして、今回名誉ある諸君方に対し、財団の役員たることをご依頼致しましたる処、御一同ご快諾を得まして今日創立評議会に御列席を忝うする事となりましたのは、実に望外の幸福で且つ光栄の至りに堪へざる次第であります。謹んで此の段御礼申し上げます。

さて、此寄付行為に関しまして一言申し上げたく存じますのは、従来私が理想としておりましたる人生観に対する覚悟に付てでありまして、実は先生方の前に申上げるのは誠に僭越の至りではありますが、暫時御清聴を煩し度く存じます。元来私は神か仏か兎に角、偉大の力を有するものありて、人間の生れ出ると同時に、人間の生存上必要なる欲望の性質を本能的に付与して世界文化の発展向上を図らしむ事になしたるものと言ふ事を確信したのであります。

又、此の天性あって初めて人類は生存する事が出来るであらうと思はれます。故に各自其欲望を達せんとして、日夜営々として働く者は其実世界人類の為神仏に勤勞せしめらるるものに外ならないのである。依て学者宗教家政治家なり、又我々營利的事業に従事するもの、其他凡て人間が其勤勞の結果に依り、得たるものは則ち天物にして、これを人類の幸福に提供すべきものにして決して自己に私にすべきものではない。我々の如き直接營利事業に従事し、得たる財産は取りも直さず天財であって、吾人は只僅に我分限に応じ、衣食住其他生活上必要なる費用の外は悉く天財であるから、一金たりとも乱に使用すべきものでない。

若し之を自家の私財として浪費し、且勤勞を怠る時は、忽ち破産の天罰を受くるものであると信じます。就ては神の使命により委託されたる人類共有の財産たる一部、即ち我持分に対する財産は宜敷天意を奉戴し我生前に於て処分すべきは当然の義務と覚悟したのであります。以上の次第が動機となりまして、今回報恩のため公益事業の基本金として金三百万円を出捐して、財団を組織し、其利得金を毎年公共事業に提供する事と致しました次第であります。将来とも本財団の評議員に御願ひ致します方々は、神仏に代り誠心誠意を以て此天財に対し、事業の緩急及び必要の程度により、公平に御使用の道を考究下されまして、天意に背かないようご注意願ひたいのであります。・・・(後略)

(「財団法人斎藤報恩会創立ノ際斎藤善右衛門演説筆記」より)

〔6〕 斎藤報恩会の産業・社会事業

N-1. 産業振興事業 (パネル展示)

斎藤報恩会の事業は學術助成に最も重点を置いたが、一方で県内を中心とした産業振興や医療・救貧などの社会事業に決して少なからぬ支援を行っていたことも忘れてはならない。その代表例をいくつか御紹介しよう。

〈産業振興事業〉

●宮城県斎藤報恩農業館

産業振興事業の中で報恩会が最も力を注いだのが農業振興事業。その中核が、小牛田町(現美里町)の「斎藤報恩農業館」の運営である。

農業館は、農業機器や関連技術の開発普及による東北地方農業の合理化・近代化を目的にした「農蚕林具館」として小牛田農林学校(現宮城県小牛田農業高校)の隣に報恩会が1925年建設。翌年宮城県に寄付され県立の「斎藤報恩農業館」となった。その後



報恩会が毎年助成を行い、1943年（昭和18）までの助成総額は40万円弱にのぼった。

農業館には館長以下農業技術の専門スタッフが置かれ、最新の農業用機器の収集・性能試験や開発研究、優良機器の展示・貸出や講習会開催、出張指導による地域への普及、破損農機具の修繕、その他農業技術に関する講演会など多様な業務をおこなった。各地の農家や関連企業からの技術相談も多く、宮城県の農業技術センターとも言うべき存在であった。花巻農学校退職後東北砕石工場に勤務していた宮沢賢治も、1931年（昭和6）に同社が開発した肥料用炭酸石灰の宮城県への普及販売のため、農業館を数度訪問し、旧知の間柄である農業館長工藤文太郎と懇談している。

1973年（昭和48）宮城県の機構改革により農業館は廃止され、建物は1978年（昭和53）に小牛田農林高校に移管。農業館が収集した農機具類は、現在東北歴史博物館に移され保存されている。

●紫雲英（レンゲソウ）の栽培奨励

紫雲英（レンゲソウ）は緑肥または牛の飼料として使われる植物。当時宮城県内で栽培される紫雲英の種子はその大半を県外からの購入に頼っていたが、年々価格が高騰し県内農家の農業経営を圧迫していたため、県内での大規模増産で必要な種子を自給することを目的に、報恩会自ら主体となって県内各地の農会（農協の前身の一つ）に紫雲英の採種圃を設置・経営させた。これにより県内紫雲英の栽培面積は4倍に増え、また品種改良も進み県内農業経済の安定を支えた。1930年（昭和5）から1936年まで合計4万3000円余りを支出した。

●産業調査所の設置

1929（昭和4）、報恩会の直営事業として、県内産業の合理化・近代化と発展のため各種調査をおこなう調査研究機関として設置。当初は七十七銀行本店内に設立されていた。米の生産、肥料の使用、農業の共同経営、緬羊飼育、農業集落の現状、産業組合の活動などについて実地調査を実施し、調査報告書を毎年刊行した。1940年（昭和15）まで2万3000円余を支出。

●発明の奨励、工芸・技術研究の支援

工業方面の振興策としては、仙台工業学校（現仙台工業高校）に設けられた「仙台技芸奨励会」への助成（1929-1939）があげられる。市内県内の技術官から各種の発明機器や工芸品、工業発展の方策を論じた論文等を募集して優秀作品に賞金を出したり、耕作技術の講習会を開いたりしていた。

また輸出工芸品の開発を目的に1928年仙台に設立され、玉虫塗などの工芸品を産み出した「商工省工芸指導所」での研究開発に対する助成も少なくない。「写真応用軽金属工芸品の研究」（1935-37）、「漆の噴射塗装に関する研究」（1936-37）、「代用材としての天然植物材料の改良に関する研究」（1940）などといった課題への助成が行われた。

N-2. 教育事業（パネル展示）

〈教育事業〉

斎藤報恩会が行った教育事業も、多岐にわたっている。

学術研究費補助事業を開始した当初は、「満鮮視察」（宮城第二高女・秋葉馬治／宮城古川高女・三原篤治；1923年度900円）、「県外視察」（宮城県図書館・池田菊左衛門；1923年度200円）、「県外視察」（宮城県教育会；1923年度1,900円）など、地元の教育界への支援が目立った。公開講演会や宗教行事（孔子会積業）などに対する援助も見られる。その後、報恩会の活動が本格化する中で、展示会や講演会などの社会教育事業に対する支援が盛んになっていった。

●展示会

1933年（昭和8）に博物館が開館すると、開館記念の「仙台開府時代資料展覧会」に続き、開館一周年記念「救荒動植物展覧会」、翌年の「伊達家蔵品展覧会」など、趣向を凝らした展覧会が次々と催された。こうした大規模な展示（半月～一ヶ月程度の開催）が1942年（昭和17）頃まで毎年開かれる一方で、無料公開される小規模展覧会（三日程度の開催）も年に数回設けられ、仙台市民が博物館を親しむ機会となった。

展示会の例

仙台絵図地図展覧会 (1935)	阿刀田令造コレクション39点	3日間 入場無料	仙台書画特別陳列 (1938)	仙台金曜会の蒐集した書画35点	2日間
受贈標本展覧会 (1935)	昭和10年度の受贈標本	3日間 入場無料	古碑拓本展覧会 (1938)	松本源吉コレクション228点を展示	5日間
奥羽俳諧四天王展覧会 (1936)	吉川五明・常世田長翠・小野素郷・松窓乙二の資料164点	5日間	日独伊三国児童生徒交驩図書展覧会 (1939)	森永製菓が当該目的のため全国から募集した作品を共同で展示。	5日間
南洋展覧会 (1936)	南洋学術探検の成果を公開。600点。	3日間 入場無料	高橋東臯俳諧書道展覧会 (1939)	斎藤善右衛門の命日を記念して展示。	3日間
宝物展覧会 (1937)	絵画、彫刻、建造物、文書、典籍、書跡、刀剣、工芸品、考古学資料など61点。	7日間	聖戦美術展覧会 (1940)	諸大家が陸軍省後援のもとに戦地の状況を描写した数百点で、観衆を発奮させたという。	8日間
東北・北海道工芸展覧会 (1937)	宮城県、東北北海道工芸協会と共同主催し、2,570点を展示。	7日間	林子平先生百五十年祭記念展覧会 (1942)	子平の自筆資料などに加え、海の記念日にちなんで米軍からの戦利品なども陳列。	4日間

●講演会

1923年（大正12）以降、宮城県教育会、浄土真宗大谷派本願寺東北別院、仙台皇道会、仙台仏教連合会、仙台孔子会などに補助金が配分され、講演会が開かれている。斎藤家の宗旨を反映してか、東本願寺への配分がやや多額であるが、神道・儒教・仏教の関係団体すべてに目配りされている様子が見える。昭和五、六年頃から支援の対象と金額が減少する傾向が読み取れる。

公開講演会の例

講演会名	内容	当該年度の補助金額	講演会名	内容	当該年度の補助金額
思想善導講演会 (1925)	「東北文化の啓発と、思想の善導」教授以下23名・東北帝国大学法文学部強立会	¥100	積業並講演会 (1930)	「孔夫子の盛徳」宇野哲人 (東京帝国大学教授)	¥270
思想善導講演会 (1925)	「思想・宗教・社会問題について」賀川豊彦 (宗教家)	¥120	思想善導講演会 (1931)	「南無阿弥陀仏の意義」稲葉道意 (前東北別院本山総務部長)	¥150
積業および講演会 (1925)	「積業沿革の概要」東川徳治 (東北帝国大学嘱託)	¥300	仙台孔子会学術講演会 (1932)	「孔夫子と政治」佐藤丑次郎 (東北帝国大学教授)	¥100
民力涵養講演会 (1926)	「日本国民と基督教」山室軍平	¥150	皇霊祭・祖霊祭講演会 (1933)	「我国共産運動の近状」古賀行倫 (宮城控訴院検事)	¥50
仙台皇道会講演会 (1927)	「敬神について」古川左京 (塩釜神社宮司)	¥250	仙台孔子会講演会 (1934)	「満支見聞の二三に就いて」曾我部静雄 (東北帝国大学助教授)	¥100
積業並講演会 (1928)	「史記の孔子伝について」岡崎文夫 (東北帝国大学教授)	¥300	本願寺東北別院教化講演会 (1935)	「大乘仏教に就いて」高楠順次郎	¥120
仙台皇道会皇霊祭等講演会 (1929)	「我国体と法律」西川一男 (宮城控訴院長)	¥150	皇霊祭・祖霊祭講演会 (1936)	「思想上より観たる近時の不詳事件について」渋谷徳三郎 (仙台市長)	¥50

N-3. 社会救済事業 (パネル展示)

〈社会救済事業〉

●医療機関への寄附

貧困のために医療を受けられない傷病患者の救済を目的として無料診断を行うための経営費の寄附がなされた。患者には医療費が支払えず不適切な治療を行い重体となった者、結核など慢性的な患者が多く治療は困難を極めたが、非常に好評であった。

●日本赤十字社宮城支部診療所 (現仙台赤十字病院)

現在仙台市太白区にある仙台赤十字病院は、1924年 (大正13)、県庁裏に「日本赤十字社宮城支部診療所」の名で発足した。支部長には宮城県知事が就任しており、「東北振興第一期総合計画」と呼ばれる県の社会救済事業の一環として開始したとみられる。当時の県知事は斎藤報恩会の評議員も兼ねた関係から、設立と運営に関わる多額の寄附を斎藤報恩会から受けることとなった。

具体的には、診療室、休養室等の新增築に必要な工事費32200円と水道電灯等設備費用の2400余円、医療器具器械等設備費に12700余円の寄附を受けるとともに、毎年の経営費とし

て約25000円をも寄附され、医療費の支払いが困難な患者や不慮の災害による傷病者に限って全額無料の診療が行われていた。また診療所の医療器具器械の設備や医員の人選には医学部教授で報恩会評議員でもあった熊谷岱蔵が尽力している。

●日本赤十字社宮城支部病院（現石巻赤十字病院）

同じく1924年から善右衛門の出身地域にあった牡鹿・桃生町村組合公立病院（後に日本赤十字社宮城支部病院となり、現在は石巻赤十字病院）にも斎藤報恩会施療部を設け年額6000円を救療費として寄附し、貧困者の治療費に充てられた。病院内には「斎藤報恩会病床」が設置され、常に満床状態であったという。

●託児所への寄附

東北地方は1902年（明治35）1905年（明治38）の冷害、1903年（明治36）の三陸災害や日露戦争による負担で農村荒廃が著しく、さらに1913年（大正2）の冷害、1918年（大正7）に米騒動と続いて社会救済が急務な状況にあった。斎藤報恩会の社会事業の一つとして行われた託児事業は、幼児を預かり保育することで工場労働者や農民が仕事に十分専念できるようにし、貧困家庭の生活を救済する目的を持っていた。

事業は1924年（大正13）から1940年（昭和15）までの間で、宮城県社会事業協会、愛国婦人会宮城支部、仙台仏教託児園、能仁保児園に寄附が行われている。これらを報恩会に紹介した評議員は、仙台市議（佐藤長成）や仙台市助役（仙台信託株式会社支配人の高城畊造）、仙台高等工業学校長（新保徳寿）などで、東北地方各界の有力者が報恩会の社会事業に深く関わっていた。

●石巻託児所・御霊屋託児所

1925年（大正14）、米騒動をきっかけに宮城県知事を会長として宮城県社会事業協会が設立され、県が主導して様々な社会救済事業を行った。報恩会からは、石巻町も関わり設立された石巻託児所と、瑞鳳寺旧建物を無料で借り設立された御霊屋託児所（現おたまや幼稚園）への経営費の寄附が行われている。

●小田原託児所

愛国婦人会宮城支部が、仙台市内小田原広丁十九番地に小田原託児所を開設していた。同所はキンビール会社工場の労働者の居住が多く、また原町に近い関係で蔬菜行商者の託児に便があったという。この他、宮城県内50か所に季節保育所を開設する際にも報恩会が寄附を行っている。

●能仁保児園

同園は曹洞宗僧侶らが主体となり、県知事や市内各宗寺院、遊郭組合長らの援助で1919年（大正8）に寺の一角に設立された。工場労働者の子供を中心に満1歳から学齢期までの子供、総勢50名あまりを託児しており、報恩会は主に経営費の寄附を行った。現在も仙

台市若林区新寺で運営されている。

●仙台仏教託児園

同園は北八番町と神子町の間位置し、輪王寺中興の祖・福定無外が設立したものである。乳幼児に対する家庭代りの保護と良習を養うだけでなく、無産労働者の生活苦の救済、生活指導、階級的思想の善導が目的とされ、実際、父母に育児上衛生上の注意喚起や、就職・疾病診療の世話も行っていった。敷地購入費、経営費や運動具の寄附が行われている。

〔7〕価格換算表

0. ちなみに現在の価格なら？(目安) (パネル展示)

掲示された学術研究	補助開始年	総額	現在の価格 (米価換算)
斎藤報恩会運営基金	1921年	300万円	26億994万円
ロックフェラー財団の寄附	1928年	125000円	1億6423万円
ヴント文庫	1923年	25000円	2212万円
狩野文庫	1924年	20000円	1770万円
スタイン文庫	1924年	13200円	1168万円
デルボー文庫	1923年	5000円	442万円
西藏仏典の研究	1925年	42947円	3800万円
奥羽史料の調査研究	1925年	7850円	694万円
秋田子爵家史料の整理	1942年	2200円	179万円
民法の歴史的比較的研究	1926年	12000円	1062万円
秋田子爵家史料の整理	1942年	2200円	179万円
民法の歴史的比較的研究	1926年	12000円	1062万円
東北方言の研究	1940年	6277円	512万円
電気を利用する通信法の研究	1924年	217000円	1億9204万円
低温研究	1929年	121900円	1億6005万円
物質の磁性に関する研究	1932年	81000円	1億635万円
地形地物の地震動に及ぼす影響に関する研究	1924年	46037円	4074万円
地磁気及地電気に関する研究	1933年	7360円	861万円
陸奥湾における生物の分布研究	1926年	14150円	1252万円
結核病の病原菌的分類に関する研究	1933年	17660円	2066万円
農学研究所	1937年	50000円	5850万円
旧仙台藩史料編纂	1923年	13750円	1216万円
東北地方温泉の研究	1941年	6540円	534万円

※農林水産省が Web で公開している玄米の平成27年度平均価格 (1石32937.5円) と『国史大辞典』にある大正10年から昭和17年まで (5年毎) の1石当たりの米価を参考に算出した。